

青年海外協力隊員レポート

セネガル・レポート

池永伊奈生（筒井）

松前町の中心で、セネガルを語る②

日本に帰ってくると、たいいていの隊員はだれかに、「日本に帰ってきて、『やっぱり日本はいいなあ』と思いませんか」と聞かれるものです。途上国はたいいていのんびりしており、そこで2年間暮らしてきた隊員は否が応でもそれに慣れてしまっていますから、帰国直後は日本社会の密度とスピードに戸惑いを覚えたりもしますが、それでもやっぱりたいいていの隊員は、日本はいいなあと思っ

ては、確かにそれぞれ異なるわけですが、私の場合は、この松前町に帰ってきて、買い物とか用事で歩いていても、道行く人に「やーい、日本人！こっちへ来い」とか「どこいくの？松山に行くんだったらおみやげ買ってきてー！あるいはもつと身も蓋もななく「お金おくれ！」と言われなくなつたのは、本当にほつとしました。

というわけで今回は、協力隊員セネガル・レポート2回目として、農村部に住む人々の生活、その人となりについて、そして、そこに隊員と

1 人々の暮らし

して派遣された私が、どのように彼らと接し、生活して来たかについて、ご紹介したいと思います。

途上国では一般的に言えることですが、セネガルでもまた都市部と農村部の貧富の差は大きく、都市部では上下水道が整備され、電気も比較的安定して使うことができます。特に首都セネガルでは、先進国並みの都市化が進んでおり、生活水準も高いです。なんとゴミ収集車も走っています。「ゴミ収集車が走っている」と言われても、日本では当たり前すぎてあまりピンと来ないかもしれせんね。例えば「愛媛に地下鉄がある」ことくらい驚きだと申し上げれば、お判りいただけるでしょうか。

一方で、都市から30分も車で走れば、そこから先は延々と「農村部」が広がるのです。隊員の大半が赴任するのは、その「農村部」です。

私が帰国してから、周りの人に、「向こうでは何を食べていたのか」をよく尋ねられました。セネガルの

主食は意外にも「米」です。魚もよく食べます。野菜は、ニンジン・玉ねぎ・ジャガイモ・キャベツなど、日本でもよく見かけるものを食べます。セネガル人は一般的に食に関してはかなり保守的で、見たことのない食べ物には気持ち悪がつて食べようとしません。一部メディアでは、日本人の目から見るとギョッとするようなものを外国人が食べるシーンを強調して表現するきらいがありますが、セネガル人の目から見れば、日本人の方がよほどギョッとするようなものを食べているように見えるでしょう。現地で学校の先生をしている人に、「日本人は魚を生で食べる」と説明したら、私のフランス語が間違っているのではないかと疑われたほどでした。

また、村人たちが暮らす家ですが、農村部では、基本的に藁葺きの屋根に土壁という非常に簡単な構造の家が主流です。向こうでは「カーズ」と呼ばれていました。だいたい4畳くらいのはらでしようか。そのような小屋を3〜5軒作り、丈のある植物の茎を束ねて作った柵で囲んで1世代が暮らします。セネガルで村と言えばカーズが20〜30ほど集まっているイメージであり、そのいかにも粗末な外見を見ると、やはりこの国の開発は遅れていると思ってしまうかも知れません。

しかしながら、カーズの中には、その内装が驚くほど整えられている

場合もあり、また通気性などの違いから、隊員が通常暮らすコンクリート製の家とは比較にならないほど内部は涼しくなっています。実際に2年間、村人の生活を観察すると、その生活の総てが「変えたくとも変えられない」と言うわけではなく、その土地の気候や、人々の暮らしに最もマッチしているということが残っているものもあることが判ります。



村人たちの家カーズ

2 先進国の人々のステレオタイプ

歴史的にも文化的にも、日本とアフリカはあまり深い関わりがあるとは言えないため、日本におけるアフリカのイメージと言うのは、例えば「水汲みに片道4時間……」のCMとか、有名人が未開の民族と心温まる交流をするとか、そういう断片的なイメージで捉えられがちです。もちろん、それらのメディアは、嘘は伝えているかも知れませんが、アフリカや途上国のことを公平に伝えているかと言うと、少し疑問です。

※ステレオタイプ：型にはまった画一的なイメージ